
触らないで下さい！！

あんどぅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

触らないで下さい！！

【Nコード】

N2090BA

【作者名】

あんどろ

【あらすじ】

ガーティレン帝国宮殿に勤めるメイドのカルラ。カルラは人に触れないという、所謂潔癖症。そんな彼女はある日、偶然皇帝陛下に出会い、手に触れられてしまう。異性に触れられ、目眩と共に意識を手放すカルラ。……これは、触れないメイドと触りたい皇帝陛下下のある物語。

第1話

うむ。

今日も良い天気になりそうだわ。

私、『カルラ・エルシーラ』は櫛も通していないボサボサな藍色の長髪に、パジャマを着たまま小さな出窓から身を乗り出し、まだ日が出ていない薄暗い空を見た。雲が一つもなく、あと数分後には見えなくなる星達が瞬く空を朝、起きたらまず確認するのがここに来てからの日課になっている。

ここはガーティレン帝国の宮殿。

この世界に一つしかない大陸の中でも、最大級を誇る広さを持つ宮殿だ。この宮殿の広さと言ったら、五年も働いているカルラでもたまに迷ってしまう位で（方向音痴という訳ではない）、寧ろこの宮殿すべての構造が分かる人がいるのかと思う位にかく広い。

そんな宮殿でメイドをしているのが、中級貴族エルシーラ家の長女のカルラである。カルラは幼い頃から宮殿で働きたいと思っていたので、十五歳になるとすぐにメイドとして働き始めた。

中級貴族と言えど、それは叔父夫婦が上級貴族で流石に親戚が貴族じゃないのは困ると言うこともあり、ギリギリ漕ぎ着けた地位である。そのため、エルシーラ家は貴族は貴族でも、貧乏貴族なのだ。家は立派だが、生活は平民と変わらない。メイドもいなければ料理人もいない。長女のカルラは必死に稼ぐ父と母を見てきたため、早くに自分が仕事に就くことに決めた。普通の貴族令嬢は、十五歳とあれば学校に通うものだが、カルラは最低限の礼儀と学力だけあれば十分と言って憧れの宮殿へ行ったのだ。

あれから五年。

カルラは二十歳になった。

メイドとしての仕事にも慣れたし、今の生活にも満足している。毎月家に仕送りをしているから、一応家のことは大丈夫だと思うし。

「よし。今日も頑張ろう」

いつも通り気合いを入れ、音が立たないように出窓を閉める。

カルラは身支度を始めた。

「おはよー、カルラ」

「おはよう、レイチェル」

同期の「レイチェル・ブラッド」は、眠たい目を擦りながら食堂で朝食を取っていたカルラの隣に座った。

「レイチェル、寝癖」

「んーどこ？」

「前髪の右側」

ショートカットの金髪をペタペタと触るレイチェル。

「わかんないよー。直してえ」

「……っ」

「あっ…ごめん」

「……大丈夫」

レイチェルはすまなそうに肩をすくめた。

カルラはどうも人に触るのが苦手である。

触られるのも苦手で、特に免疫のない異性に触れたら…考えただけで目眩がする。

何故だかはわからない。いつからこんなに嫌になったかもわからない。

人に触るのは生理的に無理なのだ。

因みに、布を挟んでいればギリギリ触られる。要するに、服の上

からはOKだ。

これは潔癖症なのだろうか。

なかなか治そうとしても治らないので、半ば諦めてはいるが、友人にも触れないとなると嫌われないか心配であるが、レイチェルはそんなカルラの側にずっと居てくれるので助かっている。

チラリと時計を見ると七時三十分を回っていた。

仕事の時間だ。

周りの使用人達も席をどんどん空けていくので、カルラとレイチェルも仕事場に行く。

カルラとレイチェルは配置が違うのでここでお別れだ。

カルラの今日の仕事は洗濯と浴槽の清掃だ。

浴槽は王族のみが使用する専用の浴槽なので、隅々まで清掃する必要があるため、ほとんどのメイドが嫌がる場所の一つだ。勿論、カルラも昨日メイド長から言われた時は内心嫌だと思っていた。カルラの嫌だは、他人が使った浴槽に触れると言うこと。素手ではやってられないため、ゴム手袋は常備品だ。

そしてカルラはポケットから使い捨て手袋を二つ出して両手にはめた。

「…よし！」

朝と同じく気合いを入れ、まずはデッキブラシを手を取った。

第2話

ヤバイ、ヤバイ。

カルラは焦っていた。

王族専用の浴槽に時間が掛かりすぎた。…と言っても、あんな馬鹿広い所を一人って無茶な話だわ。メイド長に人員を増やすように言おうかしら、と考えたがすぐに意識の隅に追いやった。

次は浴槽の清掃を終えたから、後はバスタオルの用意だ。

それが終わったら次は洗濯…。まったく、忙しい忙しい。

今、カルラは新しいバスタオルを取りに行き、パタパタと誰もいない廊下を大量のバスタオルを抱えながら走る。もし誰かいたら廊下を走るのはしないが、今は時間が無いので走っている。

パサッ…、

「…あっ」

やっちゃった…。

バスタオルが一枚、落ちてしまった。

カルラは大量のバスタオルを抱えているため、手を伸ばせない。一旦バスタオルを床に置こうか迷ったが、床から再び持ち上げるには重すぎた。

それに、カルラは身長が低いため（二十歳にして百五十五センチ位）、前があまり見えない。どこに落としたかわからない。

ま、仕方ないから後で取りに来よう。

そう考え、浴槽に戻ろうと踵を返した時…。

「これ、落としたか？」

「え？」

振り返ると、言うまでもなく白いバスタオルの山に視界が占拠

されている。

相手の顔が見えないので体を横向きにし、顔を声の主に向ける。

「…皇帝陛下っ!？」

そこには銀髪を肩上で切り揃え、髪と同色の瞳を持つ超美形の男、ガーティレン帝国帝王『レイティス・ガーティレン』が目の前にいた。その手にはさっき落としたバスタオルが。

「大丈夫か？手伝おうー!」

「い、いいえ!だ、ただ、大丈夫…です…!」

カルラは初めてこんな至近距離でレイティスを見て、見事にパニックをお越しかけている。

「そうか」

レイティスはそう言うと、カルラが抱えているバスタオルの上に拾ったバスタオルを置いた。

「…置いたのは良いんだけど、ありがたかったんだけど……。バスタオルを置きざまに、陛下の手が、わ、わた、私の手に当たって…!」

「……ヒッ!」

思わず口から出た声(?)。それと同時に全身が粟立つ。

お、おと男の人に、さ、触られた!?!?!?!

カルラは目眩と共に意識を手放した。

第3話

「……むう……ん？」

あら？

この天井、知ってる。

ああ、自分の部屋か…。

って…

「あああ！！！」

うわあー！

今一瞬で全て思い出した！

そうだ、私陛下に会って手が当たって…当たっ…て？

「…起きた？」

「あ…、メイド長」

メイド長はニコツと笑うと、片手に持っていた温かいお茶をカルラに手渡した。有り難う御座います、と言ってカルラはそれを飲んだ。

「それにしても…まさか陛下の前で気絶するとはねえ」

「……すみません」

そう。私はやっぱりあの時気絶したんそうです。

ああ…。これはもしかしたらクビかなあ。そう考えていた時、扉が大きく二回、ノックされた。するとメイド長が出てくれて、なにやら話をしている。ここからじゃあまり良く聞こえない。

ちょうど気になって見に行こうとしたら、レイティス皇帝陛下が突然現れました。

「…へ、陛下！？あ、あの先程は…」

「カルラと言ったな。調子はどうだ？」

カルラはとりあえず謝ろうとしたところを、レイティスが発した事で最後まで言えなかった。

「え…？あ、はい。大丈夫…です」

「そうか。なら良い」

何だか訳がわからなくなっていたカルラに、レイティスは一つ質問した。

「…先程メイド長に聞いたが、お前は人に触れないとは本当か？」

「…はい」

「この私でもか」

「…申し訳ございません」

カルラは俯きながら、プルプルと震えるのをこらえながら泣きそうなのにも耐えた。

すると、肩をポンツと優しく叩かれた。カルラは少しビクツとしたが、それだけだった。

「服の上からなら大丈夫なのか」

「は、はい…。ギリギリ」

小さく返事をし、カルラは顔を少し上げると、驚いたことにレイティスが優しく微笑んでいた。

勿論、こんな美形男子に微笑まれたらどんな女性でもコロツと落ちてしまうだろう。現に、カルラもドキツとした。耳が熱い。

再び俯くと、レイティスはクスリと笑い、そろそろ執務があるからと退室した。

レイティスは扉に手を掛けそのまま行くかと思ったら、一度振り向いてカルラに爆弾を落としていった。

「また、会いにこよう」

第4話

「また、会いにしよう」

この言葉がまだ、鼓膜に張り付いている。

「…会いについて…私、貴族って言ってもメイドよ？」

「あれ、カルラは嫌なの？」

「嫌…じゃないけど」

夜。

あの後、一応仕事に戻ったカルラは途中だった仕事に戻って仕事を終わらせ、部屋に帰るとレイチェルが勝手に部屋に入っていた。

そしてレイチェルはカルラを見るなり、心配そうにカルラの身体中を観察した。

「突然倒れたって聞いたから心配したけど…そう言う事だったのね」

「…誰にも言わないでくれる？」

「分かってる分かってる」

レイチェルはそうとう心配していたので、事情を知らないレイチェルにあの事を話したのだ。

あの事については、メイド長は誰にも言っていないくて助かった。

「…にしても、また来るって言われても私達メイドだから、何時部屋に戻るかもわからないのにね」

「そうなのよね…」

はぁ、と深い溜め息が幾度となく口から滑り落ちる。

そんなカルラを見てレイチェルは苦笑いを浮かべながらフォローした。

「でも、ほら。もしかしたら陛下のいたずらかもよ？カルラ、綺麗だから」

「…そ、そんなことないわよ！」

面と向かって綺麗と言われたら、顔が熱くなるを感じて俯いたカルラはむう、と唸りながら両手で赤い顔を挟み、早く冷める様にむにむにと頬を押したり離したり。

その様子を眺めていたレイチェルは頬杖をつきながら、さっきのフォローを見事に自分で壊した。

「まあ、カルラは何気なくやる行動が可愛いから、陛下実は惚れたのかもね。一目惚れってやつ？」

「…なっ!？」

カルラの顔は更に炎上。もう林檎みたいに真っ赤だ。

「弱いねー、その手の話には」

レイチェルはからかうようにケタケタ笑う。

すると、自分だけ苛められるのに気に食わなくなったカルラはベツドから枕を引っ張り出し、笑うレイチェルの顔面に投げつけた。

「ぼふぁっ!……このっ」

顔面に直撃した枕を次はカルラに投げつける。

しばらく二人は、笑いながらこれが続けた。

第5話

死闘を終えたレイチェルが部屋に帰ってからカルラは風呂に入り、今はベッドの上で本を読んでいる。

まだ寝るには少し早いので、愛読書の『メイドの心得100』に目を通す。

ー…コツンッ

突然、何が当たる音がした。

カルラは隣の部屋から聞こえたものと思い、一度顔を上げたが再び本に戻す。

ー…コツン、コツン

「…？」

また音がする。しかも、良く聞くとそれはカーテンの締まった窓から聞こえる。

流石に不審に思ったカルラは本を閉じ、恐る恐る窓に向かった。

まだ、何かが窓に当たる音がする。

意を決してカルラはカーテンを開いた。

「っ！！」

ここは二階なので下にある庭を見ると、黒いローブのフードを此方から顔が見える程度に上げ、レイティスが小石を投げていた。

カーテンが開かれ、慌てて窓を開けるカルラに、レイティスはしーっ、と人差し指を口の前に立ててカルラに静かにするようジェスチャーした。

「えーと、陛下…？」

「なんだ？」

レイティスが見事な身体能力で二階まで登り、躊躇なくカルラの部屋に入った。その様子を呆然と見ていたカルラは、はっと我に返ると、今この状況を把握しまいとレイティスに何故来たのか訊ねようとした。

「な、何故こちらにいら…！」

「喉が渴いた。お茶、いれてくれないか？」

「え。あ、はい」

レイティスはローブを脱ぎながら、カルラの言葉を遮って言った。カルラは言われた通り、お茶の準備を始めた。

（昨日新しい紅茶買ったって良かったわ…）

そう思いながらお茶の入ったカップを一つ、もう既にテーブルに付いているレイティスの前に置いた。

「お菓子はいかがなさいますか」

「いや、いい」

優雅にお茶を飲むレイティスを部屋の隅に立って見ていると、ふとレイティスと目が合った。

「お前も座れ」

有無を言わせない言い方だったので、カルラは渋々レイティスの目の前のイスに腰掛けた。

（うう、私今パジャマなのに…。まさか陛下にパジャマ姿を見られるなんて）

俯いたままカルラはレイティスが言葉を発するのを待った。また、遮られる気がしたのだ。

案の定、沈黙はそこまで長くは続かなかった。

「…何故、俺がここに来たと思う？」

「えっ？…さ、さあ？わかりかねます」

すると、飲み終わったカップをテーブルに置き、頬杖を着きながら新しい玩具を見る子供の様な、しかしどこかにまた違う感情がチ

ラリと伺える笑みを浮かべながらレイティスは本日二回目の爆弾を投下した。

「…お前に興味が湧いたんだ。カルラ・エルシーラ」
「…へ？」

第6話

「興味…?」

「ああ」

カルラはレイティスが言ったことを頭で理解することが出来なかった。

「…どう言うことでしょうか?」

とりあえず、焦る思考から質問という選択肢を選んだ。

すると、レイティスはその問いに躊躇いなく答えてくれた。

「俺はお前に興味を持ったんだよ。人に触れないなんて、面白いじゃないか」

「面白い…ですか」

「ああ」

「…：な、何が面白いと言うのです?」

人の悩みを面白いとは…。カルラは少しカチンときた。

しかし、そんなカルラを知ってか知らずか、レイティスは女心を射止める眩しい笑顔を向けた。

「男なら、触れないのなら、触りたいと思うものだ」

「っ!?!」

こんなことを極上スマイルで言われたら、赤面しないほうがおかしい。

カルラは熱くなる顔を俯いてレイティスに見えないようにした。

そんなカルラの様子を楽しそうに見つめるレイティス。その視線に気付いて、更に顔を下げるカルラ。

しばらく沈黙が落ちる。

レイチェルの次はレイティスに顔を赤くされたカルラは、少し落ち着いたのを自分に確認すると、震える声で訊ねた。

「…し、しかし、私はメイドですよ?陛下の下にはもっと、美しい女性が沢山いらっしやいます。それに、そんな事のために、わざわざ

ざ御忙しい時間を割くなんて…」

それを聞いたレイティスは、呆れたように溜め息をついた。

「まあ、確かに俺の下には後宮があるが、あそこの女どもは皆権力やら金銭やらに溺れている。俺が後宮に訪れれば、彼奴らは自分の自慢話しかない。…まったく、つまらないよ」

「はあ…」

レイティスは皇帝であるため、勿論その下には後宮が存在する。そしてそこには、カルラの記憶では十人の側室がいた筈だ。

「で、ちょうど生き抜きに城内を歩いていたら、お前に会ったんだ。…まさか、倒れるとは思わなかったが」

「…すみません」

「そう言えば、覚えていないとは思うが、俺がお前をメイド長の部屋まで運んだんだぞ？」

「…なっ！」

今日は一日中顔が赤いきがしてきた。レイティスに抱えられていたのを想像してしまったのだ。

一人であたふたしていると、レイティスはそれに水をさした。

「…で？」

「へ？」

（で？ってなによ…）

陛下に言う言葉ではないが、不意に心のなかで思ってしまう。

「お礼」

「お礼…。あ、有り難う御座いました…？」

よくわからなくて最後が疑問符になってしまった。

首を傾げて言ったら、レイティスは可笑しそうに手を差し出した。

「？」

「触れ」

「…む、無理です」

（お礼ってそっちでしたか。触れないって知っててこんなこと…！
うう、でも運んでくれたって言うし。しかも皇帝陛下様に…！）

そんなことを考えていると、レイティスが手を更に近付けてきた。こちらから見ていると、お菓子頂戴って言ってる子供みたいだと一瞬可笑しく思ったカルラは、ブンブンと頭を振り、今はこの状況をどうにかしなくてはと、そちらに思考を向けた。

「いや、あの…だから、無理ですって」

「…じゃあ、仕方がないか」

わかってくれた！と、喜びも束の間。レイティスは黒い笑みを浮かべた。

「では、お前が俺をメイドの分際で誘惑したとかなんとか言っって解雇するとうるか」

「解雇！そ、それだけは…！！」

（解雇されたら家が潰れちゃうわ！てか、誘惑したってなによ！）

レイティスは必死にせがむカルラに再び手を差し出す。

「っ！！」

カルラは意を決して人差し指でレイティスの手のひらに一瞬、チヨンツと触れた。

（…えいっ！）

レイティスは触れられた手のひらを無言で見つめる。

因みに、カルラはこの動作だけで身体的、精神的に疲れ、イスにもたれ掛かって下を向いていたため、レイティスが手のひらを見つめているのは気がつかない。

「…うむ。では、今日はこれで許す」

「ありがとうございます…って今日は？」

なんだか疲れて敬語が外れてきているが、本人は自覚がない。

一方レイティスはイスから立ち上がり、ローブを羽織る。

どうやら、帰るようだ。

「では、また明日来る。…その時はちゃんとした格好でいろよ」

そう言っていると、最初と同じく窓から出ていった。

ちゃんとした格好って何だろうと思って自分を見ると、そう言えばパジャマだったと思いだし、はっと赤くした顔を開けっぱなしの

窓に移した。

「：ひどい」

誰もいない窓に向かってぼやき、窓から顔を出し、見下ろすと、レイテイスの姿は無かった。

（何で窓から出入りしたのかしら？）

窓を閉め、カーテンも締める。

カルラはくたくたになりながら、ベッドへダイブすると、灯りを消さないまま眠りに落ちた。

第7話（前書き）

今回はレイテイス目線です。

第7話

ちょうど執務に区切りがつき、俺は宮殿内を生き抜きに歩いていた。

この時期は、少し前に年内で最大の行事『建国記念日』が終わったため、ここ数ヶ月は執務に余裕がある。と言っても、謁見や大きな行事が無いと言うだけで、書類は執務室で決済を待っているのだが…。

まあ、そんなわけで俺はあてもなくさ迷っている。

しばらく歩いていたら、手前にある角から小さな『子猫』がバスタオルの山を抱えながらちょこちょこ出てきたではないか。

子猫は俺が後ろに居ることには気付かず前に行く。

その時は、別にただ小さな子猫の様なメイドが居るな、程度にしか思っていなかった。

パサッ…

流石に無理をして持ちすぎたのだろう。バスタオルが一枚、落ちた。

メイドはそれに気付いたが、バスタオルが邪魔で取れない。仕方がなく、それを放置して去ろうとしていたところに、俺は話しかけた。

「これ、落としたか」

するとメイドは振り返るが、前が見えないため横向きになって俺を確認すると真っ赤になりながら焦っていた。

まあ、初めて俺と話したりする女は皆顔を赤らめるが、このメイ

ドはそれ以上に赤くなり、焦って咬みまくっている。

俺はその様子を見て、ちょっと悪戯したくなった。

わざとバスタオルを山に戻すとき、手に触れてみた。

これでもっと赤くなるかと思ったが、メイドは逆に真っ青になって倒れた。

「お、おいっ…！」

これには流石に驚いた。

俺は慌ててメイドを抱えてメイド長の部屋に行った。

メイド長は、俺と青くなっているメイドを見るなり、目を点にした。そして俺とメイドを交互に見て、何か一人で納得した様子を見せ、中のベットに寝かせ様頼まれた。

メイド長に聞いたところ、彼女の名はカルラ・エルシーラ。五年前から働いていると言う。

(…エルシーラ公のご令嬢か)

もう少し聞くと、彼女は人に触れないという変わった潔癖症の持ち主だとか。

「…陛下、もしやカルラにお触りになったのでは？」

「あ、ああ。バスタオルを落としたからそれに戻してやろうとしたら…：少しかすったんだ」

悪戯とは流石に言えなかった。

メイド長は幼いときの世話係だったので、怒られたら少々面倒なことになるのは学習済みだ。

メイド長はベットの顔色が良くなってきたカルラを困った様に見る。

「あの子も努力はしたんだけど、なかなか…」

「そうなのか。…おっと、すまんがそろそろ俺は戻らないと」

「そうですか。申し訳ございません、後程カルラには礼に行かせますので…。どうせカルラを苛めたのも、執務が大分落ち着いている

のだろうから、行かせても大丈夫でしょう？ 私も行きますから」

「……」

やはり、長年俺の世話をしていただけあってお見通しか。

「……いや、あと少して書類は片付くから俺から行くよ」

「陛下が？」

「駄目か？…では、また」

俺はそう言って執務室に戻った。

執務室に戻ると、側近の男、『フォランド・ジェンキンス』が明らかに苛立って散らかった俺の机を整理していた。

フォランドは俺が帰ってきたのに気付くと、多分俺の帰りが遅いとどやすために大股で近付いてきたが、あと三步位の所でピタリと足を止め、顔を歪め、一步下がった。

「：レイティス、お前なんだその顔は」

フォランドは俺を呼び捨てに加え、ため口で訊ねた。

俺とフォランドは従兄弟だが、従兄弟と言うより幼いときからの親友だ。俺が皇帝に即位してから、側近になるよう俺が命じたのだ。そんなフォランドの言葉に、俺は意味がわからず、逆に訊ねた。

「なにか付いているか？」

「…違うよ」

するとフォランドは、俺の机の中を勝手にあさり、手鏡をこちらに向けた。

「なにか良いことでもあったのか？」

手鏡を覗くと、自分の口が弧を描いていた

見てはいけないものを見たと言うように、フォランドは俺と目を合わせてくれない。

手鏡をもとの場所に戻しながら、フォランドが恐る恐る口を開いた。

「お前がまさか、そんな風ににやけるなんて夢にも思わなかったよ。

「一時間で戻らないと思ったら、なにをしていたんだい？」

「子猫に悪戯してた」

「は？」

「そしたら子猫が気絶したから、あとで見舞いに行ってくる」

「……………訳がわからない」

「まあ、そんな訳だから、残りの未処理の書類を早く寄越せ。あと二時間で終らす」

「……」

俺は呆然としているフロランドにあと二時間で終らすと言うと、突然我にかえり、何度も俺をチラチラ疑わしい目で見ながら、書類を渡してくるのだった。

第7話（後書き）

次回はレイテイス目線第二弾です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2090ba/>

触らないで下さい！！

2012年1月10日09時46分発行